

# 文法は好きですか？

杉本 武

人文社会科学研究科助教授

## 1. 専門は何ですか？

私の専門は、日本語学、その中でも現代日本語文法論である。その昔、私がまだ大学院生だった頃、初めて会った人などに大学院にいることを話すと、よく聞かれる質問があった。「専門は何ですか？」当時、この質問が苦手であった。と言うのも、その頃は、日本語の研究を示す分野として、一般に「国語学」という名称が使われていた。最近、「国語学会」も「日本語学会」と名称を変更したように、今までこそ、「日本語学」という名称もふつうに使われるようになつたが、当時は、まだまだ新しい名称であった。

さて、専門が「国語学」と答えると、一様に「ふうん」というような顔をされる。どうも、小中高校の「国語」の時間を思い出し、「作者は何を言いたいか」というようなことをやっているように思うらしい。そうではないと答えると、じゃあどんなことをやっているのか、ということになる。そこ

で、次の答えが「文法論」ということになる。すると、今度は、小中高校でやった動詞の活用表やら品詞分類を思い出し、大概的人は、え？という顔をする。かつて『言語生活』（筑摩書房）という雑誌の特集で「文法嫌い」という特集があったほど、人々の文法に対するイメージはよくない。その原因の一つが、小中高校で覚えさせられる、無味乾燥な活用表、品詞分類であろう。

我々は、日本語を母語としていれば、活用表や品詞分類を意識しなくとも、ふつうに日本語を話し、理解することができる。なのに、なぜそれを暗記しなければならないのかという疑問が生じるのは当然である。しかし、日本語学における文法論は、小中高校の文法とは全く異なるものである。

## 2. 文法論って何をやるの？

日本語の文法と言うと、確定して固定的なものと捉えられ、さらには規範として機

能する（例えば、ら抜きことはは正しくないとか）ものと捉えられやすい。しかし、ここで「文法」というものを捉える時、二つの「文法」を考えなければならない。一つは、人間の脳内に存在する「内在的な文法」である。人間がそれぞれの母語（など）を自由に操れるということは、その言語に関する何らかの知識を持っているということを意味する。しかし、知識と言っても、この知識を意識に上らせることはできない。しばしば、言語に関する知識は「無意識の知識」と言われる。一方、もう一つの「文法」として、この無意識の知識である文法を、（紙の上などに）記述、説明したものとしての「外在的な文法」がある。活用表や品詞分類は、この外在的な文法の（あくまでも）片鱗なのである。

文法論とは、この内在的な文法を外在化することである。しかしながら、内在的な文法が無意識の知識である以上、その知識は直接観察することは不可能である。そこで、唯一観察可能なデータである文（例文）をもとに、そこに見出されるルールを探っていくことになる。

### 3. 私の研究テーマ

私の本来の（学生時代からの）研究テーマは、現代日本語の格助詞、特に「が」「を」「に」である。格助詞「が」「を」「に」は、日

本語の文を形作る上で、非常に重要な働きをするものである。ここでは、格助詞「を」を例に、格助詞の問題の一端を見てみよう。

まず、次の二つの文の格助詞「を」のついた要素（それぞれ「ゴール」「哲学の小径」）の働きは同じであろうか。

- (1) ゴールキーパーがゴールを守っている。
- (2) 太郎が哲学の小径を歩いた。

(1) の「ゴール」は、「守る」という動作の対象であると考えられるが、(2) の「哲学の小径」は、「歩く」という動作の対象とは考えにくく、移動の経路と考えられる。また、別の観点から言うと、「守る」は他動詞であり、「ゴール」は目的語とされるが、「歩く」は自動詞であり、定義上、「哲学の小径」は目的語とは考えられない（「歩く」も他動詞であり、「哲学の小径」は目的語であるとする考え方もあるが）。つまり、格助詞「を」には、2種類のものがあるように見える。

このような違いを、どのように客観的に示すか（どのようなテストでもって認定するか）であるが、一つの方法として、受動文の主語になるかどうかということが考えられる。次のように、(1) は受動文にすることができるが、(2) は受動文にすることができない（次の文で、文頭の “\*” は、その文が非文法的な文（非文）であることを示す）。

(3) ゴールはゴールキーパーに守られている。

(4) \*哲学の小径は太郎に歩かれている。

ここで、2種類の格助詞「を」を判別するテストとして、受動文の主語になるかどうかということを用いたわけであるが、このテストを確実にするためには、受動文についての考察も必要になる。と言うのも、日本語の受動文は、英語と異なり、自動詞からも受動文を作ることができるということがあり、単純にテストとして用いることはできないからである。例えば、次の受動文を見てみよう。

(5) 太郎は赤ん坊に泣かれて、疲れなかった。このように、「泣く」という動詞は、自動詞でありながら、受動文を作ることができる。このような受動文は、「被害の受動文」などと呼ばれる。

また、日本語の受動文は、一見自動詞に見えるものから作られることがある。

(6)a. 織田信長が明智光秀に会った。

b.\* 明智光秀が織田信長に会われた。

(7)a. 明智光秀が織田信長にそむいた。

b. 織田信長が明智光秀にそむかれた。

「会う」も「そむく」も、「～を」という要素をとらないので、自動詞と考えられるが、(7)のように、「そむく」は受動文になる（なお、この受動文は被害の受動文ではない）。

また、先の「歩く」のような動詞であっ

ても、場合によっては、受動文になることがある。

(8) 哲学の小径は大勢の人に歩かれ、親しまれている。

このような、一筋縄ではいかない、日本語の受動文の性格が、格助詞「を」の区別の問題を複雑なものにする。このため、日本語の格助詞「を」の働きを解明するためには、受動文の振る舞いを解明する必要がある。このような理由から、私の研究も、当初の格助詞から受動文の研究に広がっていった。

格助詞にしても、受動文にしても、日本語の文法論の中でも、非常にポピュラーな問題であり、厖大な研究がなされている。かと言って、既に十分な記述がなされているとは言えないと思われる。今こそ、過去の研究を検証しながら、総合する時期になっているのではないかと考えている。

#### 4. 最近の研究

格助詞に関して最近進めている研究は、格助詞の中でも「複合格助詞」と呼ばれるものの分析である。複合格助詞とは、「によって」「について」「にとって」「のために」のように、複合語が全体で一個の格助詞として機能するものである。このような格助詞は、他の「が」「を」「に」「と」「で」「から」「まで」などのような格助詞に比べると、周

辺的なものとみなされ、十分な研究がなされていっているとは言いがたい。

とを願っている。  
(すぎもと たけし／日本語学)

このような複合格助詞を含む複合助詞について、ここ数年、大学院の授業でも取り上げ、受講生にも個々の形式の分析を行つてもらっている。今年度は、それらの分析を収めた報告書を作成する予定である。このような、ある共通した性質を持つ語のグループは、個々の語の詳細な記述をもとに、全体の体系化を行う必要がある（もちろん、体系化によって、個々の語の記述が修正を迫られることもある）。体系化に向けて、複合助詞の研究に寄与するものになればと思っている。

## 5. 文法は好きですか？

さて、以上のように、文法論と言っても、活用や品詞分類ばかりではないのであるが、過去の記憶もあり、とっつきにくいものと思われがちである。例えば学類レベルで言えば、日本語学の中でも、文法論は少なくとも人気のある分野とは言えないかもしれない。しかし、決して、文法論は無味乾燥な学問ではなく、隠された規則性を発見するおもしろさ、体系の美しさを追求するおもしろさがある。また、筑波大学は、他大学には類を見ないほど多くの日本語文法論のスタッフを擁している。もっと多くの学生に文法論のおもしろさを知つてもらうこ